

おひざのうえで 2023⑦

(副園長の子育て応援通信)

「より良いものを」

せんりひじり幼稚園 副園長 安達かえで



あっという間に今年も残り少なくなってきました。

先月の話になりますが、公開保育を実施し130人ほどの乳幼児教育関係者の方々がお越しくださいました。北海道や富山などの遠方からお越しいただき、深い学びの機会になりました。

ECEQ型公開保育というのは、公開する園が課題とと思っていることを問いとして提示し、参加者はその問いに対しての意見を交換し合うというものです。多くの園が、この公開保育を経て自園の課題に向き合い、保育や組織の在り方を向上させていくこととなります。国の乳幼児教育の質の向上のために、園長が全日本私立幼稚園連盟の研究研修委員長の時に文科省の委託研究として全日の機構の先生方と共にこのシステムを構築しました。ECEQコーディネーターという資格を持つ他園の園長先生方がいて、STEP1から5までの段階を経て、園の学びを伴走してくれます。

うちの園には、最初に園長が、そして副園長、敦子先生、晴子先生が順にコーディネーターの資格を取り、現在は亜里沙先生が資格取得中です。園内にこんなにコーディネーターがいるところは全国どこにも無いのですが、ファシリテートすることで自力で質の向上に向かうことができることと、他の園の公開保育のお役に立てたらという思いもあります。実際に、うちの園は自分たちで課題を見つけ、自力で様々な手法で解決する力がありますが、今回の公開保育では多くのヒントもいただき、学び多い公開保育でした。

実は、これと同じようなやり取りが、年長組の「お店屋さんプロジェクト」で行なわれていることに気がきました。

年長組の保護者の方には、お店屋さんプロジェクトにお越し下さりありがとうございます。

保護者の皆様が楽しんでくださる姿や、びっくりのリアクションに、満足げな子どもたちでした。張り切ってお店を運営している年長組さんですが、ここに至るまで1か月近くかけて、話し合いや試行錯誤を重ねて作り上げてきました。ドキュメンテーションでそのプロセスを見て頂いてきましたが、実際にご来店いただき、その本物志向の出来栄に驚かれたのではないのでしょうか。本物のようにクオリティーを追求するのさることながら、お店を運営してみてもうまいかなかったことを、どうやったら次にうまくいくのか、システムや接客の仕方を振り返って次につなげていくという非常に高度なことを経験しています。



先日、近隣の小学校の校長先生教頭先生をお招きし、お店屋さんにお客様として来ていただ

きました。ちょうど、ふじ組さん(うどん屋さん)が振り返り会議をしているところで足を止めてくださいました。

担任のみき先生が「今日、お店をやってみてどうだった?」「楽しかったひとはこっち、大変だった人はこっちに集まってみて。」と声をかけると、ほとんどが「楽しかった」のほうに集まってきましたが、数名だけ「大変だった」の所に疲れた様子で座っていました。その少数の子どもに焦点を当てて「本当に疲れているね。どうしてこんなに疲れたの?」とみき先生が聞くと、「お客さんがどんどん来て、二人でいらっしやいませようこそ・・・とずっと言ってたから喉が痛い・・・」と横になるほど疲れた様子。「本当だね。ずっと声を出していたから大変だったよね」と先生が言うと、すかさず「明日は僕と一緒にやる」という子もいれば、「お土産を渡す係は、最初はあまりやることないからそっちを手伝うといいんじゃないかなあ」と、冷静に役割を俯瞰して改善策を出す子もいました。他にも自分の担当ではないところも手伝って疲れたという子もいて、臨機応変に動く子が何人もいたことにも驚きました。「頑張ったんだねえ」の共感と共に、更にどのようにしたらいいかを考えることができる子どもたちのやりとりのすばらしさを、ちょうど小学校の教頭先生に見て頂くことができました。自分たちで考え自分たちで作り上げたいという主体的な力が既に5歳児は持っている、それを大人が支えていくことによって生き生きとした育ちに繋がっていくことを見て頂きたかったの、とてもいい機会になりました。



振り返り会議をするとき私たちはよくKPT法を使いますが、PDCA法やYWT法や、など様々な振り返り手法もありますが、5歳児が次はもっと良いものにしたいという思いから、これに似た手法で振り返って課題を明確にし、次につなげていこうとする姿には驚きます。これを繰り返しながら、よりクオリティー高く、自分たちの満足のいくお店に仕上げていくわけです。

また、このようなプロジェクト活動を成功させるカギは、子どもの声を聴くことから出発すること。提案された内容が大切にされる民主的なやり取りが基本になることだと思います。そして意思決定する権利は子どもたちにあるということが大切です。



子どもの力は大人の想像を超えていきます。そんな子どもたちの姿にいつも感動しますが、子どもも自分の力を信じているので、伸びようとしている姿に大人の勝手な思い込みで蓋をしてしまうことがないように、子どもの思いに寄り添っていくことが大切な役割だと感じます。

さて年長のお店屋さんが終わると、それに憧れた年中少組の真似っこが始まります。小さなお店があちこちに開店していきませんが、よく見ているなあと感心します。お店屋さんプロジェクトはもうここから始まっているんですね。

